

夜の診療所 心に寄り添う

大阪・ミナミの繁華街「アメリカ村」の雑居ビルに、夜だけ開く精神科診療所がある。院長の片上徹也さん(31)が、くも膜下出血で倒れて絶望と向き合った経験を糧に、約2年前に開業。心の病を抱えながら、昼間は仕事などで受診できない若者たちの「駆け込み寺」になっている。

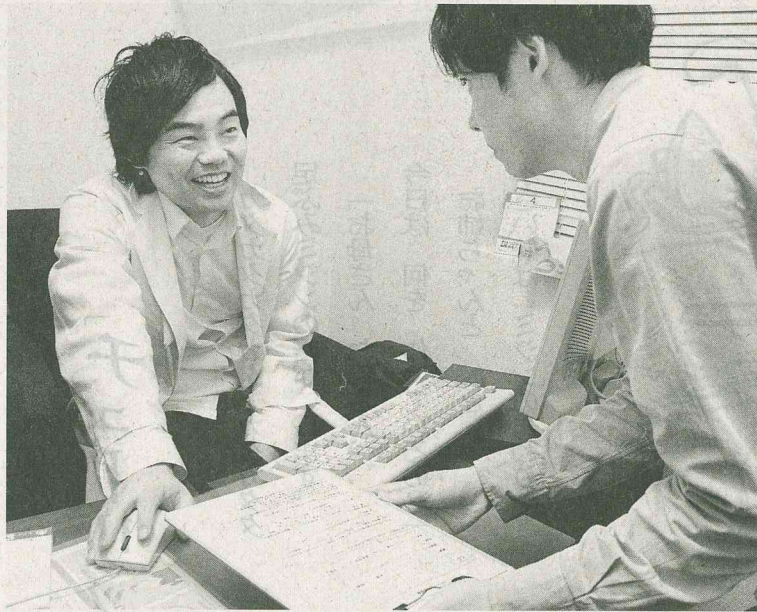
(加野聡子)

アメリカ村

夜も多くの若者や観光客が行き交うアメリカ村。古着店やレコード店が入るビルの3階に、診療所「アウルクリニック」はある。

アウル(AWL)は夜の森で活動するフクロウを意味する。診察は平日午後7～11時。救急以外で深夜まで診療する精神科は全国でも珍しいという。

午後7時半に訪れたうつ病の女性(20)がいた。昨年夏、上司の叱責が重な



スタッフと話す片上さん(左)。この日診察した患者について「表情が明るくなった」と笑顔で振り返った(大阪市中央区で)＝笹井利恵子撮影

り、夜は眠れず食事もできなくなった。厳しい職場で休みは取りづらく、夜間専門の同クリニックを探し当て、11月から通っている。「ここは診療所とわかりにくく、人目を気にせず入りやすい」と言う。片上さんの診療は、カウンセリングで心のバランスを回

復させる認知行動療法が中心だ。どのように暮らし、なぜ症状が出たのか。「じっくり話を聞けば、薬だけに頼らなくてもいい」。診察に1時間かけることもある。この女性はかなり回復し、転職して習い事も始めた。「最初は人間不信で、先生と目を

くも膜下出血患った院長 若者とじっくり対話

合わせるのも怖かったけど、ゆっくり聞いてもらえ安心できた。今では近所のお兄さんと雑談しにきているみたい」と笑った。

*

片上さんはくも膜下出血の後遺症で、左手を動かせず、左足をひきずって歩く。「生きてるだけ、話せるだけで幸せやで」。患者にそう語りかける。

もともと「昼に通院しにくい若者向けの診療所を開きたい」との夢を抱いていたが、精神科医として歩み出す直前の12年3月に倒れた。生死のふちをさまよい、左半身がまひした。

8か月の入院生活。医師としてやっていけるのか。趣味のテニスもサーフィンもできない。絶望の中でふと、患者が抱える苦しみ、つらさにそれまで目を向けてこなかったことに気がついた。「生きがいを失うのは、どれほどつらいことか」。再起の思いを強く、リハビリに励んだ。

13年秋、大阪府内の病院に就職。そこで給料を得ながら、14年7月に精神科・内科の夜間診療所としてオープンした。開業を急いだのは「同

世代の患者と同じ目線でいられるうちに」と考えたからだ。

昼間の病院では高齢の患者が多いが、ここには、10～20歳代の店員や学生、風俗店で働く女性が口コミやインターネットで知って訪れる。精神科の患者は、2年近くで400人を超えた。

片上さんは「苦しみを知った今だからこそ、患者さんに寄り添っていける。それが自分の使命だと思う」と力を込める。

*

川上憲人・東京大教授らのチームが02～06年に行った研究では、「精神障害を経験した人のうち、受診・相談した人は約3割にすぎない」とされている。

「受診のために職場で休むと言いついていく若者もいるとみられる」。研究に加わった国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所の立森久照・統計解析研究室長は言う。「軽症であれば必ずしも受診する必要はないが、すぐに治療を受けられる環境作りは重要だ。時間や場所の選択肢が広がることは、患者にとって有益だ」